

H30・12・16

第2号

通巻145号

学院通信

発行
金光学院
719-0111
岡山県浅口市
金光町大谷1486
TEL (0865) 42-3115
FAX (0865) 42-3114



直信教会参拝 (芸備教会)

前期を終えて

金光学院院長 高橋 寛志



前期の授業を終え、学行面では一段落して、学院職員も、少しほっとしているところである。私のことを言えば、「本教概説」を十二時間、「三代金光様」の講義を二時間させていただいた。「本教概説」では、信心して生神金光大神化していくことが大切であること、また、その信心に応じた神の働きが起るので、自分の信心を高めれば高めるほど、本当の神の働きが頂けること、また、難儀も自分を磨いてくれる面があり、難儀を通してお育ていただく面があることなどを話したが、これからは、信行や実習などを通して、学んだことを自身の内容として落とし込んでいってほしい。

期間的に言えば、すでに三分の二の学院修行を終え、残り三分の一ということになる。今までの総仕上げと言えば、そう言えなくもない。学んだことを実生活で生かしてもらいたい、また、自らに修行を課して取り組んでもらいたいと思う。

学院を卒業したら、自分で課題を見つけ、信心修行をしていかなければならない。その課題を設定し、取り組む力もつけてもらいたいと思っている。そうすれば、自ら課題を見つけ、信心を高め続けることができるからである。

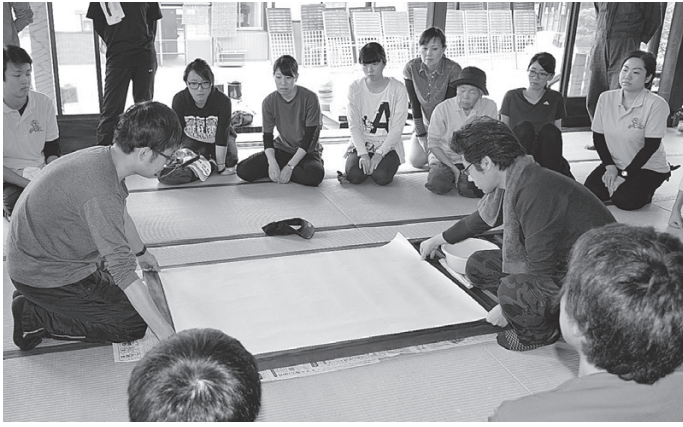
そういうことを思えば、あと四か月ほどの期間は短いと思う。心して取り組んでもらいたい。その取り組み続ける努力が辛抱強さを培うのだと思う。今まで、学院生は、真面目に、よく頑張ったと思う。その真面目さが成長には必要なものだ。これから寒さが厳しくなり、生活自体が厳しい修行になっていく。そうした中で、自分に厳しく、しかし、無理はせず、適度な厳しさを自分に課しつつ、残りの学院生活を送ってもらいたい。

もう、学院修行の終わりが視野に入ってきた。学院生がしっかりと内実を湛えて、新しい布教現場に巣立つ姿を思い描きながら、今を大切にしている。

前期から後期へ

学院次長 坂口 光正

五月十五日の入学式以来、七か月が経ちました。学院は、日常の起居一切を「信心の修行（信行）」として取り組む場であるとともに、創設以来、学院生が輪番で、奉仕（結界奉仕）の御用を務め、奉仕を中心とした祈りの生活の場とも言えます。入学以来、年齢も、育った環境も



修徳殿障子張り (説明)

全く違う学院生同士が、互いに支え合い、協力し合って共同生活を営んでいます。そこでは、人間関係をはじめとした様々な問題に出合い、悩みや心配を抱えることもあるでしょう。ご結果には、時として悩みを抱えた同期の学院生らがお届けに参ります。奉仕は、お届けに耳を傾け、それを御祈念帳に記し、御祈念をします。つまり御祈念帳には、学院生皆の祈りがこもっています。奉仕の御用を務めた学院生は、御祈念帳をめくりながら祈ることと、皆の祈りを身をもって知ることになります。そしてお互いが祈り祈られている関係にあることを実感します。祈る自分を体験しつつ、祈られている自分に気付くという働きが、奉仕の御用を通じて生まれます。さらには、これまで、教会長、家族、縁戚の方々、あるいは教会の信者さんに祈られてきた自分であったことに気付きます。もつと言えば、金光様の大きな祈りに包まれての学院修行であるという実感も得られているのではないのでしょうか。

今年の夏は、記録的な猛暑で、学院修行はとても厳しいものとなりました。しかし、前期の信行目標である「神に心を向ける」生活を進め、学院生たちは、ここまで大過なく日々修行のおかげを受けています。それはお互いの祈り合いがあればこそのおかげであるとも思います。後期は、信行目標を「神の願いに生きる」と設定しています。後期は選択別研修、礼典実習、在籍外教会実習などを中心し、前期の学行によって得られたお道の知識や考え方を、卒業後の御用を見据えて、より実践的に取り組むことを願っています。み教えは、神の願いが言葉によって表現されたものですが、たった一つのみ教えを実践することがいかに難しいかを、多くの先師たちは教えてくれています。お道の教師として「神の願いに生きる」ことを求め、実践していくことが、真に出来るようになるために、卒業までの残り四か月間を、一日一日大切に過ごしてもらいたいと念願しています。

関係各位のお祈り添えを、よろしくお願ひいたします。



生神金光大神大祭御用奉仕 (祭場係)



池掃除

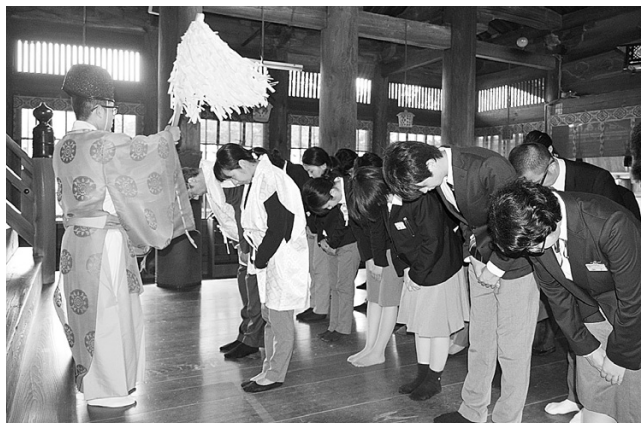
「川」までの歩み

■聖蹟巡拝 (吉備路・寂光院方面)

教祖の事蹟を訪ねること、また他宗教への理解を深めることを願いとして、九月十五日、吉備路方面の聖蹟巡拝を実施した。まず、直信・片岡次郎四郎師によって開かれた才崎教会へ参拝し、教会長より、初代にまつわる教話を拝聴した。その中で「みきの信心」について詳しく教えてくださった。その後、教祖四十二歳



才崎教会



吉備津神社

の事蹟に関わる西大寺観音院・吉備津神社参拝に続いて、本教と同じく幕末期に開かれた黒住教本部を訪れた。黒住教本部では本部神殿に参拝し、朝日を拝む「日拝」が行われる「日拝壇」を拝観し、黒住教の教義についての説明を受けた。また、宝物館において、歴史的にも貴重な資料の数々を拝観した。

十一月十二日、大谷の檀那寺である寂光院、氏神である加茂八幡神社へ、それぞれ参拝した。寂光院では、法要の後、住職の法話を拝聴し、一人ひとりお焼香をあげさせていただき、川手家先祖、養父母の位牌を拝観した。



黒住教・宝物館

■学院秋季霊祭・生神金光大神大祭

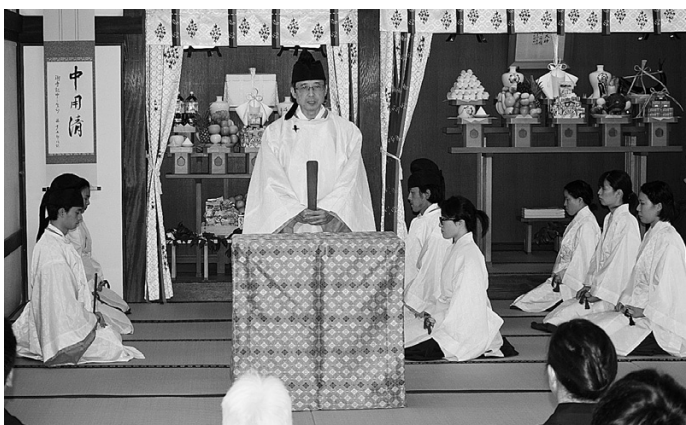
本部広前のご比礼を受け、学院広前に於いて、九月二十六日に秋季霊祭、十月十三日に生神金光大神大祭が執り行われた。

これらの祭典は、神様、生神金光大神様、さらには学院霊舎に祀られている霊神様(物故職員と学院生を合わせて二百十六柱)に、ここまで学院修行を進めさせていただいていることへのお礼と真心を現す祭典として奉仕している。

祭典を迎えるにあたり、祭員は、神様、靈様にお喜び頂けるように、少しでも成

長すべく一か月ほど習礼に励み、実意丁寧に祭典を仕えさせていただいた。さらに、祭詞起草員は起草・浄書、調饌・祭事は神饌物、紙垂の調饌と祭具の調整、楽人は奏楽、舞人は吉備舞、更衣係は祭服の着付け等、学院生全員で御用を分担し、今日までのお礼をお供えさせていただいた。

複数の御用を兼ねる者も多く、どこまで尽くせば神様、霊様への真心となるのか、不安を感じたり、戸惑ったりしつつも、実意丁寧に取り組もうと求め続ける中にそれぞれ得るものがあったようだ。



学院秋季霊祭 (学院長挨拶)



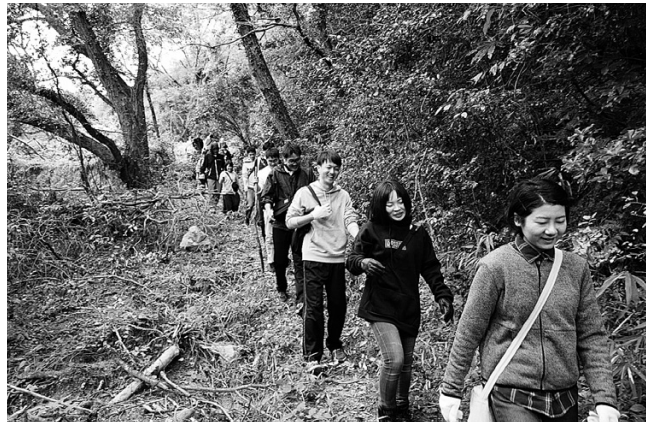
生神金光大神大祭 (吉備舞奉納)

御用を通し、それぞれが、生神金光大神様、諸霊神様への思いを新たにしたいのではないだろうか。

■第三・四・五回求道の日

学院生活の基本に立ち返り、自己の信心を正していくことを願い、原則として月の朔日を「求道の日」と定め、教主金光様「お出まし」をお迎えし、終日黒衣で過ごしている。回毎の日課には講話拝聴、共励会、『金光大神覚』筆写、徒歩行等がある。

第三回は、『金光大神覚』筆写と夏期在籍教会実習内容をもとにした個別懇談を



求道の日 (金之神道)

行った。第四回は、船着場であった黒崎の港から教祖広前へ至る参拝道であった「金乃神道」を歩き、当時参拝された多くの人々へ思いを巡らせた。また道中、金光四神様の奥様である高瀬姫様のご生家(安部家)にも立ち寄った。第五回は、『回生の冒険者 崔宰漢』を鑑賞し、午後からは、境内の洒掃をし、本部広前で三十分の神習を行った。

■文化活動合同茶会

秋晴れの十一月七日、学院広前で第二十回合同茶会が開催され、来賓の教学研究所長、所管部職員をはじめ、文化活

動担当講師、学院生、職員ら四十五名が参加した。前期の教養科目の一つである文化活動には、書道・華道・茶道・典楽があり、半年間で十六時間が割り当てられている。その成果発表と各活動の交流を願いとして開催しているのが、合同茶会である。

開放した障子から暖かい陽が差すお広前の一角には、秋の花材をふんだんに盛り込んだ生け花と、書き手の思いのこもった書が展示された。参加者たちは、息の合った奏楽と吉備舞を鑑賞した後、一服の抹茶と和菓子を頂いた。日常と違



合同茶会 (茶道)

う学院広前で日本文化を堪能し、楽しく語り合った。ご指導くださった講師の先生方に、御礼申し上げます。

■創設記念日記念行事

今年、学院の前身である神道金光教会学問所が開かれて百二十四年を迎える。十一月二十九日、本部広前朝参拝の折、学院長が金光様に創設記念日のお礼のお届けをし、その後、八時より学院広前において創設記念式が執り行われた。引き続き、記念行事として、教祖直信によって開かれた笠岡、芸備、六条院教会の広前に巡拝した(参拝順)。各教会では、



笠岡教会・教話拝聴



六条院教会・旧広前

ご祈念、お届けの後、教会長より、初代にまつわる教話を拝聴した。また、教祖が厄晴れ祈願に参拝したと伝えられ、教団設立にも由縁のある沼名前神社に参拝した。

直信諸師が道開きに尽力した場所や、教祖が足を運んだ場所を訪れ、教祖をはじめ、直信諸師へ思いを寄せる一日となった。

■修徳殿入殿

修行の場を修徳殿に移すことを通して、教主金光様の御取次をいただくことの意義や、お道の教師を志願する者としての自覚を深めることを願い、修徳殿に

入殿している。

第一回(九月)は、「教師志願の理由や、在籍教会・各家庭の信心の歩みをもとに、現在、どのような信心の流れの中にあるのかを確認する」との願いにより、年齢順で編成された班別で実施した。第二回(十二月)は、「前期に学んだことをもとに、本教の信心生活について求め合う」という願いのもと実施した。輔導、副輔導の教導をいただき、それぞれに、ここまでの学院修行を振りかえり、ここからの課題等を確認できた。なお、来年三月には卒業後を見据えての、第三回入殿を実施する予定である。



男子修徳殿入殿(第1回)



教祖生誕奉祝行事



研究所見学

学院生の



信心の成長



滋賀県・近江野洲教会
石原 実可子

学院生活、早七か月を過ごさせて頂きました。一見同じ日課の繰り返し返しのように、一日たりとも同じ日ではなく、御祈念一つにしても祈り込む時もあるれば、願う方が変わることもあり、変化を追っていくことはおもしろいです。

毎日、私たちの身の上には大なり小なり心に懸かる出来事が起きてきます。内容によっては心を占領される程大きな問題もあります。その時、思い出すのは「問題があるから良い。それに取り組むことで人のこと、自分のことがわかる。何もなければ何もありません、何もわからない」というある先生の言葉。きっと神様は出来事を通して、私たちに信心の成長を促してくださっているのだと思います。どうあることが正解なのかはわかりません。

